

曾野綾子

天上の青

下

天上の青

下

冒野綾子

毎日新聞社

てんじょう　あお
天　上　の　青　　下

1990年 9 月 20 日 第1刷

1990年 12 月 25 日 第21刷

著　者　　そ　　の　　あや　　こ
著　者　　曽　　野　　綾　　子

編集人　沢　　晶　　　　　毅

発行人　川　　合　　多喜夫

発行所　毎　日　新　聞　社

☎100-51 東京都千代田区一ツ橋

☎530 大　阪　市　北　区　堂　島

☎802 北九州市小倉北区紺屋町

☎450 名　古　屋　市　中　村　区　名　駅

印刷・製本／中央精版

©Ayako Sono Printed in Japan 1990

ISBN4-620-10420-5

目次

第十三章	虚　　空	5
第十四章	崖の上の家	41
第十五章	復讐ごっこ	59
第十六章	罨	86
第十七章	朝の会話	123
第十八章	陽も風も空も	151
第十九章	幾つもの横顔	168
第二十章	蜘蛛の糸	191
第二十一章	死を待つ人の家	236
第二十二章	払暁の散歩	257
第二十三章	乱　　入	281
第二十四章	誕生日の贈り物	312
第二十五章	岡の上の大きな木	328
第二十六章	岐　　路	349

装
幀

菊
地
信
義

天上の青下

第十三章 虚 空

波多雪子^{はたゆきこ}は、妹の智子^{ともこ}が休みの日を、「主人がいるみたい」で、面倒臭くもあり、たまにはこういう緊張もいいという気持ちで受け止めていた。

妹がうちにいるとは言っても、仕事は同じようにするし、彼女が仕立物が広げてある部屋に入ってきて長くいることはほとんどないのだが、それでも、心持ち、いつもの日より、あたりが散らからないように気をつけてはいる。足の踏み場もない、という状況は、当事者はよくても、他人には気持ち悪いものだと思うからである。

「この頃、年かな。前の晩遅くなると、疲れが翌日まわしになるね」

十時頃起きてきた智子は、煙草をふかしながら台所の食卓に坐り、コーヒーのカップを前に言う。以前の雪子は、このコーヒーはこれから食事をする前触れなのか、それともこれが朝食の全部なのか、少しは気にしたものであった。

しかし最近では、そういうことをあまり考えなくなった。食べたいという意志をはっきり示した時に作りだせばいいのである。この寝ているでもなく、起きているでもない、朦朧^{もうちろう}とした午前の時間が、

妹にとっては貴重なストレス解消の時なのだと理解できるようになったからである。

「昨日帰って来たの、何時だったの？」

気配で目を覚ましはしたのだが、そのまま眠れなくなることを恐れて、時計も見なかったのである。

「二時半、かな」

「遅いなんてもんじゃないわね。早い朝帰りだわ」

「心配になったもんだから、例の金谷美津子のとこへ寄って来たのよ」

通り魔のような男に押し入られてレイプされた、という妹の元の部下である。

「それがね、見たところは穏やかに夫婦とも仲よく暮らしてるのよ。旦那も出て来て『美津子が一番可哀そうなんで、私が見てやらなければ、』と思ってます。子供もいることだし……』なんてけっこうなこと言ってるのよ。だから、そういう挨拶ができるようになったんなら、あの問題に関しても、二人の間にはどうやら心理的な解決ができたんだろう、と思ってる」と美津子が激しく泣いたりしてね」

「嬉し泣きというわけじゃなくて？」

雪子は尋ねた。

「私も一瞬、そうなのかと思った。だけどそうじゃないわね。夫婦して取り繕ってると感じるだけ」

夫は前よりも、口数が少なくなっていた。そして、力なくそんな会話を交わした後、金谷氏はまだ九時というのに、「お先に」と挨拶もせず、さっさと隣の部屋で寝てしまった。不眠症のようなところがある、と聞いていたのに、隣室まで聞こえるほどの大騒ぎであった。

「何か特別に疲れるようなことがあったんじゃないの？」

「と、私も思ったのよ。だけど、もしそうなら『実はこれこれこういうことがあって、めっちゃめちゃに疲れましたので、今日は失礼してお先に休ませてもらいます』って一言言えば済むことでしょ。

金谷氏、っていうのは、そういうところ、むしろやたらに気がつく人なのよ。それがそうしないんだから」

金谷氏が寝てしまってから、智子のかえって安心して、金谷家に「いすわる」気になった。とは言っても、広いとは言えないマンションである。隣室の金谷氏の鼾が絶えず聞こえていなかったら、智子は、かなり話題を選ばねばならないと感じていた。

「それでも、私はまだ、疑ってたのよ」

と智子は言い添えた。

「何を？」

「私、疑い深い性格だからね。彼は鼾をかいてるふりをして、実は聞き耳を立ててるんじゃないか、と思った」

「でも、聞き耳を立てる人が、自分で音を立てるってのも不自然だわ」

雪子はその光景を想像すると、漫画的に思えて、思わず一瞬、笑いかけた。

「私はね、根性が悪いからね、そこまで疑うのよ」

智子と金谷美津子の話はそれからほんとうに始まったのであった。

夫は事件以来、表向きはどこも変化はない。ああいうことがあったから、離婚しようなどという言葉も口にしたことはなかった。

「じゃそれで、いいんじゃないの？ って私、言ったのよ。こういうことは、滑って転んだ擦り剥き^すの傷みたいなもので、すぐには治らないのよ。だから、決定的なことにならずに済めば、自然に解決して行くもんだと思うわ、って私、言ったのよ」

「私もそう思うわ。人間って忘れっぽいもんだもの」

雪子も言った。

しかし金谷夫妻の關係はそんな穏やかな状態ではなかった。表立った変化はなくても、夫が無反応になったことに、美津子は耐^たえていた。夫は責めもしない。残酷なことを口にするのでもない。ただ極度に無口になった。

「もともと、お喋りでない人なの？」

雪子は尋ねた。

「男だからね。女と違って、適切を絵に描いたみたいところがある人だったわよ。お喋りじゃないけど、ここぞと思うところにはきちんと発言する人ってよくいるでしょう。その適切さが、逆にちょっと問題だと思うことはあったけど」

智子と自分は性格も外見もずいぶん違う姉妹だと思っていた。しかしこういう言葉を聞くと、神経の一本くらいは、確実に似ているのを感じておかしくなった。

人間は避けられなかった衝撃に遭^あうと、そのまま身と心がかがめて——丸めて、と言ったほうがいいかもしれないが——ひたすらそれに耐える。心の傷の治療には、麻薬はあっても薬はない。自然の治療力^{ちりよく}を待つほかはないのである。だから、事件直後は、いささか興奮気味であった美津子の夫が、少し経つと静かになり、そのことについては徹底して黙して時間を過ごしていることに、美津子は初め感謝こそすれ、ほとんど違和感を覚えなかった。

しかしそのうちに、美津子は暗い変化をその静かさのうちに読むようになった。

「美津子が言うには、初めのうち旦那が黙っているのは、心も落ち着いて来て、自分に対する^{いた}労りの気持が定着したからだろう、と思った、って言うのよ。私なら初めからそんなふうには思いつかないけどね」

「私もだわ」

雪子は言った。

「黙ってるのが礼儀、というもんじゃないわね。夫婦なんだから。自然に必要な時には、そのことに触れていいじゃない。全く触れない、っていうのは、むしろこだわってる証拠でしょう」

「美津子って子は、そこまで分析的に言っていないだけだね」

智子はゆっくりと、煙草に火をつけた。

「多分、雪ちゃんの言ってることと、同じ点に勘づいたんだと思うよ」

夫の銀行での仕事ぶりはどうなのか、美津子は聞き出すすべもなかった。恐らく長年し馴れた業務だし、他人が気づかない程度には支障なく勤めているのだろうと思う。しかし家に帰ってから夫は変わった。

夫は以前のように、テレビで野球や相撲や、時にはクイズ番組も見ている。その後ろ姿を見ていると、美津子は「よかった」と思わねばならない、と自分の心に言い聞かせていた。日常性はいささかも崩れていなかった。

しかし夫がしばしば、全く画面の内容を理解していないことに、美津子は気づいたのである。

「今日は、どっちが勝ってるの？」

という質問をするのは、美津子の夫に対する礼儀のようなものであった。美津子はスポーツには、ほとんど興味がなかったのである。すると夫は、今が何回の表なのか裏なのか、どっちがどれだけ勝っているのか負けているのか、答えることができなかった。

「あなた、何を見てるの？」

美津子は思わず夫に言った。

「どれだけ点が入ってるかも、わかってないの？」

その言葉が、詰るような調子にならないように気をつけるだけで、美津子は精いっぱいだった。

「いや、ちょっと考えごとをしてたから」

「あなた、体の具合悪い？」

「いや、そんなことはないよ」

ごく最近行われた銀行の健康診断でも、全く問題ないと言われたことは、美津子も聞いていた。

「男は電車の中でもうちでも、時々仕事のことを考えてるもんだ」

夫の説明はそう思っただけで、どこにも矛盾はない。美津子自身だって、電車の中で考えごとを始めると、二駅も三駅も通過したのに気づかないことはよくある。しかし、そう言われても、美津子は夫の言葉を納得してはいなかった。夫が嘘をついていると思っただけではない。しかし夫が仕事に没頭して、野球の勝ち負けも見逃しているとは、とうてい信じられなかった。

確かに夫は、今までにも仕事を自分の家に持ち込む癖はあった。内容はわからないのだが、会議の準備だと称する分厚い書類を持って帰って、夜遅くまで机に向かっていたことはある。しかし、それは、いかにも「実務」という感じで、机に向かわずに、仕事のことを考えていることではなかった。

夫は本来、秀才型の人物であった。総てのことに、彼は意識的であった。たとえ遊びでも充分に意欲的であった。しかし最近の夫は何をしていても、ほとんど考えずにやっているように見える。スポーツなどというものは、やる人は真剣でも、観客は気楽に楽しむものだ。だから勝負に一喜一憂などしていない、と言われればそれまでなのだが、それにしても試合の経過が頭に入っていないのを見ていうのも異様なのである。

「何だか、困った状態ね」

妹の智子から話を聞くと、雪子は言った。

「そうなの。何だか、いい経過を辿ってないのよ。でも、まだ結論を出す時期じゃないからね。そう言ったら美津子が、いつまでもそう思ってたやううちに、私たち夫婦は人生の一番大切な若い時を失いそうな気がする、って言うんだけどね」

「でもそれより生き方ないんだから、それでいいんだわ」

雪子は言った。

「そうなの。昨日の晩、遅くまで付き合ってたのは、解決策を考えて来たってわけじゃないのよ。ただ美津子は、私に喋ると少しは気持が楽になるらしいからね」

「それはいいこととして来たわ」

雪子は人生の持ち時間というものに対して、自分の場合を考えていた。結婚には適齢期などない、とよく人は言う。そしてその言葉は、決して嘘でもなく、誰かを安易に慰めようとする意図を持つものでもなかった。むしろそれは確固とした真実であった。しかしそれにもかかわらず、雪子は心のどこかで、一生結婚のチャンスなどなく生きる自分の姿が、眼に見えるように感じていた。

しかし、それならそれでしかたがないのである。なぜなら、それ以外に方法がないことについて、人間は深く思いをかける必要はないのであった。自分が努力しなかったから、ことがならなかった、というなら、反省も必要であろう。しかし現世には、れっきとして、運に左右される部分があった。今、学校では、運というものの存在を認めないような教育をしているという。運が悪い、と言って諦めるような姿勢は、政治の貧困や社会悪を認めることになる、と教えるのだと、噂に聞いたことがある。しかし雪子は運の影響を受けない人生がこの世にあるなどとは、想像することもできなかった。

その時、玄関から慌ただしく戸が開けられる音と共に、

「波多さん、ごめんください！ 波多さん！」

と押し入るような声が聞こえた。

はっとして、雪子は反射的に立ち上がりながら、その声は時々配達をしてくれる酒屋の主人に違いないと判断していた。

「ちよっとすみません！」

「はい！」

ジーパンをはいたシャツ姿の、酒屋の若い主人の顔は引きつっていた。

「隣の、岩村のおばあちゃん……」

「どうしたの!？」

「死んじやないんだけどね。おれが行ったら返事がないから、上がってみたら倒れてるんだ」

雪子は素早く玄関の三和土に下りて、つかかけを履いていた。

「傍で声をかけたら、返事はしたんだよ。疲れたから、ちよっと横になってる、って言うんだけど、蒲団も敷かずに、普段着で、敷居の上に寝てるんだ。おかしいよ、あれは……」

雪子は答えもせずに駆け出していた。

岩村家の玄関で履物を飛ばすような勢いで脱ぎ捨て、家に入ると、酒屋が言ったように、六畳と八畳との間の敷居が腰の下になるような不自然な位置に、ハツは仰向けに寝ていた。

「おばあちゃん、どうしたんですか？」

雪子は取り敢えず、まともに痛くなく畳の上に体が横たえられるように、敷居から老女の体をずらしながら尋ねた。

「ちよっとね、体がだるくなったから寝ていただけなの」

細い声である。

「おばあちゃん、いつからなの？　いつから、ここで寝ていたの？」

その問いにもう返事はなかった。呼吸はしているが、人が来たということで気が緩んだのかもしれない、と雪子は思った。

「このままにしといちゃ、まずいだろうね」

酒屋の主人が言った。

「そうね、いつから、ご飯食べてないかもわからないし」

「救急車を呼んだ方がいいんじゃないだろうか」

「そうしよう」

二人の会話が聞こえていないはずなのに「そんな必要はないよ」と老女が言わないところを見ると、やはりそうすべきなのだろう、と雪子は判断していた。

酒屋の主人が一一九番を呼んで、場所の説明をしているのを聞きながら、雪子は台所に立って行ってみた。調理をした痕跡はほとんどなかった。掃除をした様子もないのに、野菜屑が散らかっているということもない。しかし電気釜の蓋を開けてみると、そこには干からびかけたご飯が底の方に少し残っていた。

それは、何とも判断のしようがない量であった。ちゃんとご飯を炊いていたから、それだけ残っていたとも言えるし、もう四、五日も前にご飯を炊いたつきり、始末もできない状態になっていたというふうにも感じられた。

雪子は岩村のおばあちゃんが使っている簞笥を開けてみた。入院させるなら、寝巻を探さなければ、と思ったのであった。しかし簞笥には、昔からハッが着ていたと思われる着物ばかりで、着古した寝

巻らしいものは見つからなかった。

「おばあちゃん、これからちょっと病院へ行つて先生にみて頂きましょうね。それにはお寝巻がいるけど、おばあちゃん、どこにおいてあるの？」

雪子は老女の耳もとで問いかけたが、やはり返事はなかった。

「あなた、これから、どこかへ行くところだった？」

雪子は酒屋の主人に尋ねた。

「いや、今日は集金に歩いてただけで、そんなことはどうでもいいんだ」

「じゃ、あなたが救急車に乗って行ってくれる？　そしてどこの病院に入ったか、後で私のうちに電話してください？　そうすれば、私が後から、入院の仕度をしてすぐ行きますから」

「ああ、いいよ」

おばあちゃんの娘、という人に電話をかけたことなどないが、そこにも、何とか知らせなければならぬ、と雪子は考えていた。

数分でサイレンの音が聞こえ、男たちが入って来る気配がした。酒屋が発見した時の状況などを説明している。雪子の姿を見ると、一人が、

「お宅、娘さんですか？」

と尋ねた。

「いいえ、お嬢さんには、すぐ連絡をお取りしてみます」

と雪子は答えて担架たんかを送り出した。

娘は、直子、と言っていたように記憶している。幸いにも、手書きの電話番号簿の一番上に「藤田直子」というのがあったので、かけてみたが、誰も出る気配はなかった。